巻　頭　言

東北大震災に想う

平成23年３月11日は北海道医療大学で卒業式が挙行された日です．夕方から開催される謝恩会に出席するため車で帰宅を急いでいた私は，橋の上で軽い揺れを感じました．帰宅してみると，震源地は三陸沖ですが北海道にも津波の危険があるとのことで，釧路港が映し出されていました．事の重大さを認識しないまま謝恩会を終えて帰宅後，三陸海岸一帯を襲った津波の映像を目にして驚愕しました．翌日からは同窓会を通じての同窓生の安否確認が行われ，連絡がなかなかとれない同窓生もいて気が晴れない日々が続きましたが，１ヵ月半が過ぎた頃どうやら皆が無事という知らせが届き安堵しました．

東北大震災は人から何もかもを奪う出来事でした．家族，住み処，街並み，仕事，思い出…．喪失体験というとき，それは，そのひと個人が強く愛着をもつ何かが奪われる体験です．しかし，東北大震災での喪失体験は，失う対象が複数であること，予期せず失う体験であること，周囲の人が同時に喪失体験をしていることが挙げられます．加えて，福島の原発が引き起こしている問題は，喪失の連鎖と慢性化というのか，そのことが，いつまで，どのように重大な喪失を引き起こすかが予測できないなどの特徴があります．

その人個人だけが喪失体験をしている時は，周囲の人々に余裕があり物理的，情緒的サポートが期待できます．しかし，コミュニティ全体が時間制限のない複雑な喪失体験をしているときには，周囲も自分のことに精一杯であり，十全なサポートが期待できません．

報道のいくつかをみると，大震災で喪失体験をした人を本質的に支えることができるのは，同じ体験をして苦しんでいる人たちです．大切な家族を失った人々は，同じ体験を共有する人々の中では思い切り泣くことができるが，皆の前では気兼ねがあって泣けないと語っています．このような報道に接すると，体験を共有しない人は助けにはなりえないことになります．しかし，実はそんな単純なことではなく，むしろ想像を絶する喪失体験の連鎖状況にあっては，個人，見知らぬ人，社会，コミュニティ，異国，などからのあらゆる肯定的な支援が必要なのだと思います．

東北大震災が当初求めたのは，救命や健康の保持であり，そこでは医師や看護職が活躍しました．次に求められたのは，個々人がどのような支援を求めているかを知って衣食住が足りるよう適切に支援していくことでした．ここでは福祉職の組織力が強く求められました．そして，１年を迎えようとしている今，人々は普通の生活を求めています．家族，住居，仕事，コミュニティなど，これまで自分を支えていたものが２度と帰ってこないという現実の中で，おはよう，こんにちは，お休みなさいの挨拶を交わし合える普通の生活というこれからを紡いでいく作業です．

東北大震災は“人の絆”の大切さを改めて私たちに教えてくれました．何もかも失いながらも新しい人，見知らぬ人との出会いの中で心と心の絆を結びながら，人々が，コミュニティが，東北がひいては日本が温かくしなやかな世界へと再生していくことを願うとともに，看護福祉職に携わるものとして再生プロセスを応援していきたいと考えております．

北海道医療大学看護福祉学部学会
第８回学術大会長　　野川　道子